

夜の空気がしみ渡ると  
肌は聲を發して苦しきよろこぶ  
みんな放擲したい、塵殺したい  
そして疾走したい  
尾張町の角だ  
寒い風が吹く

(十月二十五日)

### 狂者の詩

吹いて來い、吹いて來い  
秩父おろしの寒い風  
山からこんころりんと吹いて來い  
世は末法だ、吹いて來い  
己の背中へ吹いて來い  
頭の中から猫が啼く  
何處かで誰かがロダンを餌にする



ココオオラ、THANK YOU VERY MUCH

銀座二丁目三丁目、それから尾張町

電車、電燈、電線電話

ちりりん、ちりりん

柳の枝さへ夜霧の中で

白ぼつけな腕を組んで

しんみに己に意見をすする氣だ

ココオオラもう一杯

サナトオゲン、ヒギヤマ、咳止めボンボン

妥協は禁制

圓滿無事は第二の問題

己は何處までも押し通す、やり通す

それだから吹いて来い、吹いて来い

秩父おろしの寒い風

山からこんころりと吹いて来い

己の肌から血が吹いた

やれおもしろや吹いて来い

何の定木で人を度る

眞面目、不眞面目、馬鹿、利口

THANK YOU VERY MUCH, VERY VERY MUCH,

お花さん、お梅さん、河内樓の若太夫さん

己を知るの己さきりだ



も一つあれば己を生んだ人間以上の魂だ  
頭の中から猫が啼く  
洋服を着た猿芝居

與一兵衛が定九郎に噛みつく  
御見物が喝采だ

世は末法だ、吹いて来い

秩父おろしの寒い風

山からこんころりんと吹いて来い

ブロゴグ

エビログ

LONDON BRIDGE IS BROKEN DOWN!

己はしまひには氣がちがひ相だ

ああ、髪の毛の香ひがする

それはあの人のだ、りんやん 羚羊の角

ココオオラもう一杯

さちがひ、さちがいに何が出来る

己はともかくも歩くのだ

銀座二丁目三丁目、それから尾張町

歌舞伎の屋根へ月が出る

己の背中へ吹いて来い

秩父おろしの寒い風

山からこんころりんと吹いて来い



(十一月二十一日)

郊外の人に

わがところはいま大風おほいかぜの如く君にむかへり  
愛人よ

いまは青き魚の肌にしみたる寒き夜もふけ渡りたり  
されば安らかに郊外きょうがいの家に眠れかし  
をさな兒こどものまことこそ君のすべてなれ  
あまり清く透きとほりたれば  
これを見るもの皆あしきころをすてけり



また善きと悪しきとは被ふ所なく其の前にあらはれた

君こそは實にこよなき審判官なれ

汚れ果てたる我がかかずの姿の中に  
をさな兒のまこともて

君はたふとき吾がわれをこそ見出でつれ

君の見いでつるものをわれは知らず

ただ我は君をこよなき審判官とすれば

君によりてこころよろこび

わがしらぬわれの

わがあたたかき肉のうちに籠れるを信ずるなり

冬なれば櫛の葉も落ちつくしたり

音もなき夜なり

わがこころはいま大風の如く君に向へり

そは地の底より湧きいづる貴くやはらかき温泉にして

君が清き肌のくまぐまを残りなくひたすなり

わがこころは君の動くがままに

はね、をどり、飛びさわげども

つねに君をまもることを忘れず

愛人よ

こは比ひなき命の靈泉なり

されば君は安らかに眠れかし



悪人のごとき寒き冬の夜なれば  
いまは安らかに郊外の家に眠れかし  
をさな兒の如く眠れかし

(十一月二十五日)

### 冬の朝のめざめ

冬の朝なれば  
ヨルダンの川も薄く氷りたる可し  
われは白き毛布に包まれて我が寢室ねむろの内うちにあり  
基督キリストに洗禮せんれいを施すヨハネの心を  
ヨハネの首を抱きたるサロオメの心を  
我はわがこころの中に求めむとす  
冬の朝あしたなれば街まちより



つつましくから、ころと下駄の音も響くなり  
大きな自然こそは我が全身の所有なれ  
しづかに運る天行のごとく  
われも歩む可し  
するどきモツカの香りは  
よみがへりたる精霊の如く眼をみはり  
いづこよりか室の内にしのび入る  
われは此の時  
むしろ數理學者の冷靜をもて  
世人の形かたもつくる社會の波動にあやしき因律のめぐるを知  
る

起きよ我が愛人よ  
冬の朝なれば  
郊外の家にも鶉は夙に來鳴く可し  
わが愛人は今くろき眼を開きたらむ  
をさな兒のごとく手を伸ばし  
朝の光りを喜び  
小鳥の聲を笑ふならむ  
かく思ふとき  
我は堪へがたき力の爲めに動かされ  
白き毛布を打ちて  
愛の頌歌ほめたをうたふなり



冬の朝なれば  
こころいそいと嘯み  
また高くさけび  
清らかにしてつよき生活をおもふ  
青き琥珀の空に  
見えざる金粉をただよふなる  
ポインタアの吠ゆる聲とほく來れば  
ものを求むる我が習癖はふるひ立ち  
たちまちに又わが愛人を戀ふるなり  
冬の朝なれば  
ヨルダンの川に氷を噛まむ

(十一月三十日)

カフェにて

無理は天下の醜惡だ  
人間仲間の惡癖だ  
酔つぱらつた課長殿よ  
さめても其の自由を失ふな



## 師走十日

師走十日の日盛りを惜しげもなく  
黒い幕にて物好きな夜よるをつくり  
アウル館の舞臺には  
北八彌次郎兵衛息せき切つて  
悲しくも馬鹿のありたけを盡すなる――  
ちらちらとちらつくフィルムは

## 鋼はがねのいろにて

その色無頼漢より送られしをかしき脅迫状の色なり  
咽喉を痛めたる辯士の聲に石川バアの鏡は照り返し  
わがこころ寒さにおびえて  
中賣の蜜豆に虎疫菌をまざまざと見つむ

出語り新内の黒きシルウエットは  
ロダンのカレエ市民の群像をつくり  
中にも一人は頓狂聲をふりしぼり

「こんなところに長居はおそれ」と



まじめくさつた節まはし

つつまし氣けに立つ烟草の煙も關かみに籠ればいちぢろく

ポマアドの匂さへ其處等こゝあたりに囁けば

かすかに辨天山の鐘もひびき

「一二三四、一二三四、三三四」と

千束町の小學校にやあらむ

疲れたる最終時間の課業の聲も我がこころを泣かしむ

亡者になりし彌次郎兵衛は

三角の紙を額に貼り

何處どこかしらぬ國道のまつただ中にて

恥を辨へぬ身振りに餘念なく

時折は撮影者の注意のままに

はだけたる着物の前をも合せ

又でんぐり返しなどもうつなり

かかる間にわが友は我が家をおとづれて

わが外出に失望の眉を寄するなり

かかる間に元老の自動車は走せ

又春着のやりくりはつき



雑誌經營者は寄稿者に催促状を送るなり

アウル館の舞臺には

北八彌次郎兵衛息せき切つて

馬鹿のありたけを盡し

師走十日の日盛りを惜しげもなく

我は青みて辯士の説明に耳を傾くるなり

(十二月十一日)

## 戦闘

宵の月が西に落ちると

薄明の地平線を被<sup>よ</sup>せる様に

かたい鋼<sup>はがね</sup>の冬の空に

今日も亦黄道光がひかる

さいろい、あをい、無数の齒が笑つてゐる

私の居る高い建築のテラスの上に

深い沈黙が襲ひかかる



不安をつつむ私の心は

龍膽丁幾八グラム、コロロホルム精二グラムと聲を出

して繰り返してゐた

すると、いきなり

戦闘は突發した

すべての調和は破れた

分子は還元せられた

私の眼界は狭くなり、私の孤獨は底の底に突き進み

無關心で過ぎた多くの憐人にも

惰性のままに來た多くの友情にも

敵は到る處にころがつてゐた

さうだ、敵だ

すべて敵だ、偶然の味方も亦敵だ

私を信ずるものの外は皆敵だ

私を量るもの、私を窺ふもの、私を試みるもの、私を

疑ふもの、私を評價するもの

是等は皆私の敵だ

其の上私を知らぬもの、私と関係なきものも亦敵だ

敵、敵、敵

すべてを切り離して、私は今戦闘を始めるのだ

窄き門より入れよと鋭い聲が聞えて來る

しかし私は何だ



私は私自身との戦闘にまづ盡さねばならぬ

私はまだ一つの雰霧星の形に過ない

多くの不純を含み、無駄を有し、稀薄を交へてゐる

私は突進せねばならぬ

そしてエエテルの軋轢によつて緊縮の度を高めなければならぬ

又アミイバの精力を以て

私でない私を私の體からだから排除しなければならぬ

一噸のピッチブレンドを破壊して耳かき程のラヂウム

を得なければならぬ

常に蟬脱し、常に更新しなければならぬ

戦闘の開始はまづ頑迷な私の破壊である

敵、敵、敵

敵は私の肉身に喰ひ入つてゐる味方の中にもあつた

私はさう思つて五體をふるはし

階段を飛び下りて街上へ出た

自働車の臭い瓦斯が私を一層苛いらだたした

静まり返つた十二月の夜の空は

私を抑へつけようとする

しかし、私は直ぐに其の静けさの裏面を感じた



そして歩き廻つた

私の肉身に喰ひ入つてゐる味方の中にも敵が居ると同時に

最も烈しい當面の敵の中にも私の姿を見ることがある  
當然私のものであるべきものをみる事がある

私は其を取らねばならない

敵の中に含まれた私の一部分！

私は其をもぎ取らないでは居られない

敵、敵、敵

私は戦闘の爲に五體をふるはし  
氷つた空氣をつき破りながら耳に聞いた  
たとへやうのない喜びの聲と  
魂にこたへる悲しい叫びとを

(十二月十四日)



一九一三年



人に

遊びぢやない

暇つぶしぢやない

あなたが私に會ひに来る

—— 晝もかかず、本も讀まず、仕事もせず ——

そして二日でも、三日でも

笑ひ、戯れ、飛びはね、又抱き

さんざ時間をちぢめ

數日を一瞬に果す

ああ、けれども

それは遊びぢやない

暇つぶしぢやない

充ちあふれた我等の餘儀ない命である

生である

力である

浪費に過ぎ過多に走るものの様に見える

八月の自然の豊富さを

あの山の奥に花さき朽ちる草草や

聲を發する日の光や



無限に動く雲のむれや  
ありあまる雷霆や  
雨や水や  
緑や赤や青や黄や  
世界にふき出る勢力を  
無駄づかひと何うして言へよう  
あなたは私に躍り  
私はあなたにうたひ  
刻刻の生を一ばいに歩むのだ  
本を抛つ刹那の私と  
本を開く刹那の私と

私の量は同じだ  
空疎な精勵と  
空疎な遊惰とを  
私に關して聯想してはいけない  
愛する心のはちされた時  
あなたは私に會ひに来る  
すべてを棄て、すべてをのり超え  
すべてをふみにじり  
又嬉嬉として



カフェにて

人間の心の影の  
あらゆる隅隅を尊重しよう  
卑屈も、粹惡も、慘憺も  
勇氣も、溫良も、涌躍も  
それが自然であるかぎり

深夜の雪

あたたかい瓦斯暖爐の火は  
ほのかな音を立て  
閉めきつた書齋の電燈は  
しづかに、やや疲れ氣味の二人を照す  
宵からの曇り空が雪にかはり  
さつき窓から見れば  
もう一面に白かつたが



ただ音もなく降りつる雪の重さを  
地上と屋根と二人のころとに感じ  
むしろ樂みを包んで軟かいその重さに  
世界は息をひそめて小供心の眼をみはる  
「これ見や、もうこんな積つたぜ」  
と、にじんだ聲が遠くに聞え  
やがてぼんぼんと下駄の齒をはたく音  
あとはだんまりの夜も十一時となれば  
話の種さへ切れ  
紅茶もものうく  
ただ二人手をとつて

聲の無い此の世の中の深い心に耳を傾け  
流れわたる時間の姿をみつめ  
ほんのり汗ばんだ顔は安らかさに満ちて  
ありとある人の感情をも容易くうけいれようとする  
又ぼんぼんぼんとはたく音の後から  
車らしい何かの響き――  
「ああ、御覽なさい、あの雪」  
と、私が言へば  
答へる人は忽ち童話の中に生き始め  
かすかに口を開いて  
雪をよろこぶ



雪も深夜をよろこんで  
数限りもなく降りつもる  
あたたかい雪  
しんしんと身に迫つて重たい雪が――

(二月十九日)

## 人類の泉

世界がわかかわかしい縁になつて  
青い雨がまた降つて來ます  
この雨の音が  
むらがり起る生物のいのちのあらはれになつて  
いつも私を堪らなくおびやかすのです  
そして私のいきり立つ魂は  
私を乗り超え私を脱れて



づんづんと私を作つてゆくのです  
いま死んで、いま生れるのです

二時が三時になり

青葉のさきから又も若葉の萌え出すやうに  
今日もこの魂の加速度を

自分ながら胸一ぱいに感じてゐました

そして極度の静寂をたもつて

ぢつと坐つてゐました

自然と涙が流れ

抱きしめる様にあなたを思ひつめてゐました

あなたは本當に私の半身です

あなたが一番たしかに私の信を握り

あなたこそ私の肉身の痛裂を奥底から分つのです

私にはあなたがある

あなたがある

私はかなり惨酷に人間の孤獨を味つて来たのです

おそろしい自棄の境にまで飛び込んだのをあなたは知  
つて居ます

私の生いのちを根から見てくれるのは

私を全部に解してくれるのは

ただあなたです

私は自分のゆく道の開路者ひらくです



私の正しさは草木の正しさです

ああ、あなたは其を生きられた眼で見えてくれるのです

もとよりあなたはあなたのいのちを持つて居ます

あなたは海水の流動する力をもつてゐます

あなたが私にある事は

微笑が私にある事です

あなたによつて私の生は複雑になり、豊富になります

そして孤獨を知りつつ、孤獨を感じないので

私は今生きてゐる社會で

もう萬人の通る通路から數歩自分の道に踏み込みました

もう共に手を取る友達はありません

ただ互に或る部分を了解し合ふ友達があるのみです

私は此の孤獨を悲しまなくなりました

此は自然であり、又必然であるのですから

そして此の孤獨に満足さへしようとするのです

けれども

私にあなたが無いとしたら――

ああ、それは想像も出来ません

想像するのも愚かです

私にはあなたがある

あなたがある



そしてあなたの内には大きな愛の世界があります  
私は人から離れて孤獨になりながら  
あなたを通じて再び人類の生きた氣息に接します  
ヒユウマニテイの中に活躍します  
すべてから脱却して  
ただあなたに向ふのです  
深い、と低い人類の泉に肌をひたすのです  
あなたは私の爲めに生れたのだ  
私にはあなたがある  
あなたがある、あなたがある

(三月十五日)

## 山

山の重さが私を攻め圍んだ  
私は大地のそそり立つ力をこころに握りしめて  
山に向つた  
山はみじろぎもしない  
山は四方から森嚴な静寂をこんこんと噴き出した  
たまらない恐怖に



私の魂は満ちた

ととつ、とつ、ととつ、ととつ、と

底の方から脈うち始めた私の全意識は  
忽ちまつばだかの山脈に押し返した

「無窮」の力をたたへろ

「無窮」の生命をたたへろ

私は山だ

私は空だ

又あの狂つた種牛だ

又あの流れる水だ

私の心は山脈のあらゆる隅隅をひたして

其處に満ちた

みちはぢけた

山はからだをのして波うち

際限のない虚空の中へはるかに

又ほがらかに

ひびき渡つた

秋の日光は一ぱいにかがやき

私は耳に天空の勝鬨をきいた



山にあふれた血と肉のよろこび！  
底にほほゑむ自然の慈愛！  
私はすべてを抱いた  
涙がながれた

(十一月四日)

よろこびを告ぐ

— TO B. LEACH —

私の敬愛するアングロサクソンの血族なる友よ  
シエクスピアを生み、ブレエクを生み  
ニュウトンを生み、ダアキンを生み  
タアナアを生み、ピアズレエを生み  
そして又、オオガスタス・ジョンを生んだ血族から生  
れた友よ  
飽くまで正しい心と敬虔な魂とを有するわが友よ



今こそ喜びの時は来た  
太陽のかがやく大道のまつただ中に奇蹟は起つた  
失はれた道は與へられ  
夢は碎け去り  
まよはしは尾を巻いて遠く逃げ  
おぼろにけむる美しさは  
隅隅までも照し渡る光の中に全身をあらはし  
すべての能はただ一條の力の中にあざなはれる時が來  
た  
ああ、わが友よ  
私の爲に強くこの手を握りたまへ

喜を以てわが爲に握りたまへ  
無慘なる廢頹者の血は遂にかの全能の光の爲に淨めら  
れた  
闇と濁とに蝕はれた私の肉身は遂に醜い殻を脱いだ  
ああ、わが異邦の友よ  
君に此を語り得る私のよろこびを思ひ給へ  
私のまことを知り、私のまことを信じ、私のまことを  
心から惜んでくれた友よ  
私の敬愛するアングロサクソンの血族なる友よ  
廣重の水の流れる國



春信の女のわらひささめく國

この國に四年を過した君は

もはや廣重の水、春信の女を戀ひ慕ふ事を爲まい

君は遠くこの國にあこがれ來て、この國のまことの相

を見た

わが友よ、わが友よ

志かし、この國の魂を君のところに容易く定めたまふ

な

そして私の敬愛するアングロサクソンの民族に告げた

まへ

世界の果てなる彼處に今まことの人の聲を聞けりと

又、世界の果てなる彼處に今いさましく新しき力湧け

りと

ああ、わが異邦の友よ

この力は今小さいが、生ある者は伸びずには居ない

この根は張れるだけ深く、遠く、細かく、廣く張るだ

らう

すべての生から生の肥料を求めらう

そして、極めてのろく、極めてたしかに、芽を吹き、

芽をふき伸びるだらう

今まで見た事のない生が姿を現すだらう

待ち、且つ見よ



ああ、此を君に語り得る私のよろこびを思ひたまへ  
飽くまで正しい心と敬虔な魂とを有するわが友よ  
私の苦しみはこれから本當に志ん身の苦しみになるに  
違ひない

私の悩みは私に死力を出させないでは置かないに違ひ  
ない

私の悲しみは私を志ばしば濡れ志ぼませるに違ひない  
志かし、私の喜は私の生を意識する時たちまち強大な  
力となつてあらはれるに違ひない  
ああ、友よ、わが敬愛する異邦の友よ  
私のために祈りたまへ

彼處なる生に祝福あれ、伸びよ、育てよ、と

(十二月五日)



現實

感激の枝葉を刈れ  
感動の根をおさへろ

冬が来た

信ふ人、  
待

まつばりと冬が来た  
八つ手の白い花も消え  
公孫樹の木も葎になつた  
さりさりとみ込むやうな冬が来た  
人にいやがられる冬  
草木に背かれ、虫類に逃げられる冬が来た



冬よ

僕に來い、僕に來い

僕は冬の力、冬は僕の餌食だ

志み透れ、つきぬけ

火事を出せ、雪で埋めろ

刃物のやうな冬が來た

(十二月五日)

冬の詩

冬だ、冬だ、何處もかも冬だ

見わたすかぎり冬だ

再び僕に會ひに來た硬骨な冬

冬よ、冬よ

躍れ、叫べ、僕の手を握れ



大きな公孫樹の木を丸坊主にした冬  
さらさらと星の頭あたまを削り出した冬  
秩父、箱根、それよりもでかい富士の山を張り飛ばし  
て来た冬  
そして、關八州の野や山にひゆうひゆうと笛をならし  
て騒ぎ廻る冬  
貧血な神経衰弱の青年や  
鼠賊のやうな小悪に智慧を絞る中年者や  
温気にはびこる蘚苔こけのやうな雜輩や  
おいぼれ共や  
懦弱で見榮坊な令嬢たちや

甘つたるい戀人や  
陰險な奥様や  
皆ひとちぢみにちぢみあがらして  
素手で大道を歩いて来た冬  
葱の畠に粉をふかせ  
青物市場に菜つばの山をつみ上げる冬  
萬物いものに生をさけび  
人間の本心をゆすぶり返し  
惨酷で、不公平で  
憐愍を輕蔑し、感情の根を洗ひ出し  
隅から隅へ畏れを配り



弱者をますます弱者にし、又殺戮し  
悍猛な人間に良心をよびさまし  
前進を強ひて朗らかな喇叭を吹き  
氣まぐれな生育を制へて痛苦と豊饒とを與へる冬  
冬は見上げた僕の友だ  
僕の體力は冬と同盟して歡喜の聲をあげる  
冬よ、冬よ  
躍れ、さけべ、腕を組まう

二

冬だ、冬だ、何處もかも冬だ

都會のまんなかも冬だ  
銀座通も冬だ  
勇敢な電車の運轉手、よく働く新聞の賣子、誠實な交  
番の巡查、體力を盡す人力車夫  
冬は汝に健康をおくる  
大時計の鐘も空へひびいて鳴りわたり  
寶石は鋭くひかり  
毛布、手袋、シャツ、帽子、ボア、マッフ、外套、毛  
皮は人間の調節性を語り  
葉巻紙巻の高價な烟草、ボムベイヤ、シクラメン、カ  
シミヤ、ペロキシイド、香水、サボン、クリイム、



白粉は、人間の贅澤と樂欲との自然性を讚美する  
ラヂウム、エマナトリウムに冬は人間の滑稽な誇大癖  
を笑ひ

湯氣の出てるカフエの飾菓子に冬は無邪氣な食慾を  
そそる

女よ、カフエの女よ

強かれ、冬のやうに強かれ

もろい汝の體からだを狡猾な遊治郎の手に投ずるな

汝の本能を尊び

女女しさと、屈從を意味する愛嬌と、わけもない笑と、

無駄なサンチマンタリズムとを根こぎにしる

そして、まめに動け、本氣にかせげ、愛を知れ、すま  
すな、かがやけ

冬のやうに無慘であれ、本當であれ

白いエプロンをかけ、鉛筆をぶらさげたカフエの女よ

けなげな愛す可き働き人ひとよ

冬は汝に堅忍をあたへる

冬は又、銀行の事務員、新聞社の探訪、保險會社の勸

誘員を驚かし

冬は自働車のひびきを喜び

停車場構内の雑踏と秩序とを莊重にいさど彩り

時のきびしさを衆人に迫る



冬よ、冬よ  
躍れ、さけべ、足をそろへろ

三

冬だ、冬だ、何處もかも冬だ  
大川端も冬だ

永代の橋下たしにかかつて赤い水線を出して居る廻運丸よ  
大膽な三百噸の航海者よ

海の高い、波に白手拭のひるがへる、鷗の啼いて喜ぶ  
冬だ

汝の力を果す時だ、汝の元氣の役立つ時だ

さうだ、さうだ、鯨のうなる様な氣笛をならせ  
檣なすに綱を張れ、旗を上げろ、黒い烟を吐け  
猶豫するな、出る、出る

あの大きい、乗りごたへのある大洋へ出る  
汽罐を鳴りひびかせろ

働いてほてつた體に雲を浴びろ  
ああ、數限りのない小舟の群よ

動け、走れ、縦横自在にこぎ廻れ  
帆かけ船は帆をかける

にたりは艦べそに水をくれろ  
水に凍えたまつ赤な手足をふり動かせ



忠實な一錢蒸氣は、我もの顔に大川を歩け  
冬は並び立つ倉庫に乾燥をめぐみ  
高い烟突の煤烟を遠く吹き消し  
大きな圓屋根を光らし  
川べりの茶屋小屋を威嚇し  
吾妻橋の人込みに歡喜する  
土工よ、人足よ、職工よ  
汗水を流して、大地に仕事をし、家を建て、機械を動  
かす天晴の勇者よ  
汝の力をふり志ほれ、汝の仕事を信仰しろ、汝の暴威  
をたけらせろ

泣く時は泣け、怒る時は怒れ、わめく時はわめけ  
やけになるな、小理窟をいふな  
冬のやうにびしびしとやれ  
背骨で重い荷をかつけ  
大きな白い息を吹け  
ああ、かはいらしい労働者よ  
冬はあくまで汝の味方だ  
骨身を惜まず正義を盡せ  
冬よ、冬よ  
躍れ、叫べ、足を出せ



四

冬だ、冬だ、何處もかも冬だ  
高臺も冬だ

馬車馬のやうに勉強する學生よ  
がむしやらに學問と角力をとれ  
負けるな、どんどんと卒業しろ  
インキ壺をぶらさげ小倉の袴をはいた若者よ  
めそめそした青年の憂鬱病にとりつかれるな  
手淫<sup>マニヤ</sup>常習<sup>ニヤ</sup>患者<sup>ニヤ</sup>となるな  
胸を張らし、大地をふみつけて歩け

大地の力を體感しろ  
汝の全身を波だたせろ  
つきぬけ、やり通せ  
何を措いても生<sup>いのち</sup>を得よ、たつた一つの生<sup>いのち</sup>を得よ  
他入よりも自分だ、社會よりも自己だ、外よりも内だ  
それを攻めろ、そして信じ切れ  
孤獨に深入りせよ  
自然を忘れるな自然をたのめ  
自然に根ざした孤獨は、とりもなほさず萬人に通ずる  
道だ  
孤獨を恐れるな、萬人にわからせようとするな、第二



義に生きるな

根のない感激に耽る事を止めよ

素より衆人の口を無視しろ

比較を好む評判記をわらへ

ああ、そして人間を感じる

愛に生きよ、愛に育て

冬の峻烈の愛を思へ、裸の愛を見よ

平和のみ愛の相すがたではない

平和と慰安とは卑屈者の糧だ

ほろりとするのを人間味と考へるな

それは循俗味だ

氷のやうに意力のはちきる自然さを味へ

いい世界をつくれ

人間を押し上げろ

未来を生かせ

人類のまだ若い事を知れ

ああ、風に吹かれる小學の生徒よ

伸びよ、育てよ

魂をきたへろ、肉をきたへろ

冬の寒さに肌をさらせ

冬は未来を包み、未来をはぐくむ

冬よ、冬よ



躍れ、叫べとどろかせ

五

冬だ、冬だ、何處もかも冬だ  
見渡すかぎり冬だ  
その中を僕はゆく  
たつた一人で――

(十二月六日)

牛

牛はのろのろと歩く  
牛は野でも山でも道でも川でも  
自分の行きたいところへは  
まっすぐに行く  
牛はただでは飛ばない、ただでは躍らない  
がちり、がちりと  
牛は砂を掘り土を掘り石をはねとばし



やつぱり牛はのろのろと歩く

牛は急ぐ事をしない

牛は力一ぱいに地面を頼つて行く

自分を載せてゐる自然の力を信じきつて行く

ひと足、ひと足、牛は自分の道を味はつて行く

ふみ出す足は必然だ

うはの空の事ではない

是でも非でも

出さないでは堪らない足を出す

牛だ

出したが最後

牛は後へはかへらない

足が地面へめり込んでもかへらない

そしてやつぱり牛はのろのろと歩く

牛はがむしやらではない

けれどもかなりがむしやらだ

邪魔なものは二本の角にひつかける

牛は非道をしない

牛はただ爲たい事をする

自然に爲たくなる事をする

牛は判断をしない

けれども牛は正直だ



牛は爲たくなつて爲た事に後悔をしない  
牛の爲た事は牛の自信を強くする  
それでもやつぱり牛はのろのろと歩く  
何處までも歩く  
自然を信じ切つて  
自然に身を任して  
がちり、がちりと自然につつ込み喰ひ込んで  
遅れても、先になつても  
自分の道を自分で行く  
雲にもものらない  
雨をも呼ばない

水の上をも泳がない  
堅い大地に蹄をつけて  
牛は平凡な大地を行く  
やくざな架空の地面にだまされない  
ひとをうらやましいとも思はない  
牛は自分の孤獨をちやんと知つてゐる  
牛は喰べたものを又喰べながら  
ちつと淋しさをふんごたへ  
さらに深く、さらに大きい孤獨の中にはいつて行く  
牛はもうと啼いて  
その時自然によびかける



自然はやつぱりもうとこたへる  
牛はそれにあやされる  
そしてやつぱり牛はのろのろと歩く  
牛は馬鹿に大まかで、かなり無器用だ  
思ひ立つてもやるまでが大變だ  
やりはじめてもきびきびとは行かない  
けれども牛は馬鹿に敏感だ  
三里さきのけだものの聲をききわける  
最善最美を直覺する  
未來を明らかに豫感する  
見よ

牛の眼は叡智にかがやく  
その眼は自然の形と魂とを一緒に見ぬく  
形のおもちやを喜ばない  
魂の影に魅せられない  
うるほひのあるやさしい牛の眼  
まつ毛の長い黒眼がちの牛の眼  
永遠を日常によび生かす牛の眼  
牛の眼は聖者の眼だ  
牛は自然をその通りにちつと見る  
見つめる  
きよろきよろときよろつかない



眼に角も立てない

牛が自然を見る事は牛が自分を見る事だ  
外を見ると一緒に内が見え

内を見ると一緒に外が見える

これは牛にとつての努力ぢやない

牛にとつての當然だ

そしてやつぱり牛はのろのろと歩く

牛は随分強情だ

けれどもむやみとは争はない

争はなければならぬ時しか争はない

ふだんはすべてをただ聞いてゐる

そして自分の仕事をしてゐる

生命をくだいて力を出す

牛の力は強い

志かし牛の力は潜力だ

弾機ではない

ねぢだ

坂に車を引き上げるねぢの力だ

牛が邪魔者をつつかけてはねとばす時は

きれ離れのいい手際だ

牛の力はねばりつこい

邪悪な闘牛者の卑劣な刃にかかる時でも



十本二十本の鎗を總身に立てられて  
よろけながらもつつかける  
つつかける  
牛の力はかうも悲壯だ  
牛の力はかうも偉大だ  
それでもやつぱり牛はのろのろと歩く  
何處までも歩く  
歩きながら草を喰ふ  
大地から生えてゐる草を喰ふ  
そして大きな體からだを肥す  
利口でやさしい眼と

なつこい舌と  
かたい爪と  
嚴肅な二本の角と  
愛情に満ちた啼聲と  
すばらしい筋肉と  
正直な涎を持つた大きな牛  
牛はのろのろと歩く  
牛は大地をふみ志めて歩く  
牛は平凡な大地を歩く



## 僕等

僕はあなたをおもふたびに  
一ばんぢかに永遠を感じる  
僕があり、あなたがある  
自分はこれに盡きてゐる  
僕のいのちと、あなたのいのちとが  
よれ合ひ、もつれあひ、とけ合ひ  
渾沌としたはじめにかへる

すべての差別見は僕等の中に價値を失ふ  
僕等にとつては凡てが絶對だ  
そこには世にいふ男女の戦がない  
信仰と敬虔と戀愛と自由とがある  
そして大變な力と權威とがある  
人間の一端と他端との融合だ  
僕は丁度自然を信じ切る心安さで  
僕等のいのちを信じてゐる  
そして世間といふものを蹂躪してゐる  
頑固な俗情に打ち勝つてゐる  
二人ははるか其處をのり超えてゐる



僕は自分の痛さがあなたの痛さである事を感じる

僕は自分のころよさがあなたのころよさである事

を感じる

自分を恃むやうにあなたをたのみ

自分が伸びてゆくのはあなたが育つて行く事だとも  
つてゐる

僕はいくら早足に歩いててもあなたを置き去りにする事

はないと信じ、安心してゐる

僕が活力にみちてる様に

あなたは若々しさにかがやいてゐる

あなたは火だ

あなたは僕に古くなればなるほど新しさを感じさせる

僕にとつてあなたは新奇の無盡蔵だ

凡ての枝葉を取り去つた現實のかたまりだ

あなたのせつぶんは僕にうるほひを興へ

あなたの抱擁は僕に極甚の滋味を興へる

あなたの冷たい手足

あなたの重たく、まろいからだ

あなたの燐光のやうな皮膚

その四肢胴體をつらぬく生きものの力

此等はみな僕の最良のいのちの糧かたとなるものだ

あなたは僕をたのみ



あなたは僕に生きる  
それがすべてあなた自身を生かす事だ  
僕等はいのちを惜しむ  
僕等は休む事を志ない  
僕等は高く、どこまでも高く僕等を押上げてゆかな  
いではたまらない  
伸びないでは  
大きくなりきらないでは  
深くなり通さないでは  
——何といふ光だ、何といふ喜だ

(十二月九日)

一九一四年



## 道程

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

ああ、自然よ

父よ

僕を一人立ちにさせた廣大な父よ

僕から目を離さないで見る事をせよ

常に父の氣魄を僕に充たせよ

この遠い道程のため  
この遠い道程のため

(二月九日)



## 愛の嘆美

底の知れない肉體の慾は  
あげ潮どきのおそろしいちから  
なほも燃え立つ汗ばんだ火に  
火龍はてんでんと躍る

ふり志さる雪は深夜に婚姻飛揚の宴をあけ  
寂寞とした空中の歡喜をさけぶ

われらは世にも美しい力にくだかれ  
このとき深密のながれに身をひたして  
いきり立つ薔薇いろの靄に息づき  
因陀羅網の珠玉に照りかへして  
われらのいのちを無盡に鑄る

冬に潜む搖籃の魔力と  
冬にめぐむ下萌の生熱と  
すべての内に燃えるものは「時」の脈搏と共に脈うち  
われらの全身に恍惚の電流をひびかす



われらの皮膚はすさまじくめざめ  
われらの内臓は生存の喜にのたうち  
毛髪は螢光を發し  
指は独自の生命を得て五體に匍ひまつはり  
道を藏した渾沌のまことの世界は  
たちまちわれらの上にその姿をあらはす  
光にみち  
幸にみち  
あらゆる差別は一音にめぐり  
毒藥と甘露とは其の筐を同じくし

堪へがたい疼痛は身をよぢらしめ  
極甚の法悦は不可思議の迷路を輝かす  
われらは雪にあたたかく埋もれ  
天然の素中にとろけて  
果てしのない地上の愛をむさぼり  
はるかにわれらの生を讃めたたへる

(二月十二日)



群集に

一人の力を尊び  
一人の意味を志のべ  
むらがりわめき、又無知の聲をあげるかの人人よ  
逃げる者も捕へる者も  
攻める者も守る者も  
ひとしく是れ魂のない動搖だ  
いのちある事實にならない事實

埋草にもならぬ塵埃ちりあかの昂奮だ  
さめよ  
一人にめざめよ  
眉をあげて怒る汝等の顔の淋しさを見よ  
其のたよりなさど、不安と  
幕を隔てた汝等自身の本體の無關心と  
重心なき浮動物のかるがるしさと  
汝等すべての其の貧しさを見よ  
いま向うから出る  
あのまんまろな月を見よ  
静かな冬の夜のこの潜力を感ぜよ



汝等の心に今めぐみつつある  
破壊性と残忍性と異常な肉體の慾望とにめざめよ  
その貴い人間性のまへに汝等自身を裸體にせよ  
そして一人にせよ  
汝一人の力にかへる事をせよ  
哀れなこの群集と群集との無益な争闘に對して  
自然のいのちを思ふ事の無意味を知れ  
汝等は道路に志かれる砂利の集團だ  
汝等は偶然に生き、偶然に死に  
張合に生き、張合に死に  
又氣質に生き、氣質に死ぬ

さめよ  
一人にめざめよ  
一人の力を尊び  
一人の意味を志のべ  
汝等の焦心に何の値があらう  
汝等の告白に何の意味があらう  
ああ、群集よ  
夜の群集よ  
又思想および藝術にかかる群集よ  
群集を生命とする群集よ  
空しき汝等一人の聲に耳を向けよ



きつかけに生き、提言に生きる事を止めよ  
偶像の中にもぐり込む事を止めよ  
志らじらしい汝等の虚言を止めよ  
群集によつて押される浮動エフエエルの潮流を蔑ろにせよ  
一人の實體に志み通り  
一人の根を深め  
一人の地下泉を掘り出せよ  
こんこんとして湧き上る生水キツを汲めよ  
偶然はあとをたち  
思ひつきは價值を失ひ  
其處にこそ自然に根ざした人間はまろく立ち現はれる

のだ  
一人の力を尊び  
一人の意味をしのべ  
むらがり、わめき、又無知の聲をあげるかの一人よ  
寒い風に凍てて光るあの大きな月をみよ  
月は公園の黒い木立と相摩して光る  
まんまろに皎然と光る

(二月十六日)



婚姻の榮誦

ほめよ、たたへよ  
婚姻のよろこびをうたへよ

新郎はむしこと新婦はむよめと  
手をとりにて立てり  
さかななるかな  
新しきいのちは今創あらためられむとす

志かしてまた  
新しき征服の歩みは今祝ことばがれたり

ほめよ、たたへよ  
婚姻のよろこびをうたへよ

新郎はむしこは力に満みてり  
新郎はよろこびにかがやけり  
新郎はあらゆる可能を其の手に握にぎれり  
新郎よ、新郎よ  
汝のよろこびを極たぎめ



汝の力を飽く事なく注ぎつくせよ  
興へられたるすべての慾望に

汝自身を信賴せよ

又永遠の理法と永遠の情念とに

汝自身を研ぎひからせよ

新郎は雄雄し

新郎はたのむ可きかな

ほめよ、たたへよ

婚姻のよろこびをうたへよ

新婦は愛に満てり

新婦はさいはひにわななけり

新婦はありとある美しさをその胸に藏せり

新婦よ、新婦よ

汝のさいはひの一志づくをも餘す事なく味へよ

汝の愛を目に新しくめざましめよ

汝の使命をおもひわづらひて

汝の本能に軛をかくるなかれ

ただかがやけよ

汝の生來を掘りふかめ

汝の深因に汝の喜怒哀樂を裏づけよ



汝は大地より湧けり

汝は何ものをも包む大地の底力を體現せよ

新婦はらふたし

新婦は愛す可きかな

ほめよ、たたへよ

婚姻のよろこびをうたへよ

新郎と新婦と手をとりにて立てり

汝等は愛に燃え、情慾に燃え

絶大の自然と共に猛進せよ

滅却は罪惡なり、恥辱なり

ただ増大せよ、眞に瞬刻のいのちを惜めよ

ほめよ、たたへよ

婚姻のよろこびをうたへよ

(三月六日)



## 萬物と共に踊る

彼は萬物を見る  
また萬物を所有する  
重いものを持ち又軽いものをもつ  
明るいものを見また暗いものを見る  
入のいふ矛盾が矛盾にならない  
砂糖の中へ鹽を入れる  
燃える火から水を取る

あらゆる對立は一つに溶ける  
あらゆる差別は一つに輝く  
相剋と戰鬪と  
排擠と鍛鍊との  
身を切る苦しさに七轉する時も  
彼は其を成し遂げる必勝の氣魄を持つ  
最も忠實であつて志かも背叛する  
最も眞摯であつて志かも惡諛する  
最も激烈な近代人であつて  
志かも最も執拗な古代人である  
最も精靈的であつて



志かも最も肉體的である  
女と共に泣き  
女と共に踊る  
女を憎み  
女を愛する  
愛憎を超えた永遠を知る  
その一源をつねに掌中に握る  
それゆゑ  
女の信頼し得る最も堅固な胸である  
純一であつて單調でない  
複雑であつて亂多でない

つねに死身で  
志かもつねに笑つてゐる  
貞潔であつて又多情である  
自由を極めて志かも或る規律がある  
そしてあらゆる凡俗と妥協とを絶してゐる  
萬物は彼に押しよせ  
彼は萬物と共に亂舞する  
天然の素と交通し  
天然の實を實とする  
すべての瑣事はみな一大事となり  
又組織となる



彼は自らに信憑し  
自らの渴慾に羅針を据ゑる  
彼にとつて  
生長は生長の意識でなくて  
渴慾の感覺である  
そして遂行の喜悅である  
そして又剩殘の不満である  
現状の不安である  
あらゆる刺戟は彼の空虚をめざめしめ  
あらゆる養ひは彼の細胞にひびき渡る  
玄微に入り

不可思議にせまる  
彼は萬物と共に踊り  
彼は萬物を見  
また萬物を所有する  
彼は絶えず憫み、絶えずのり越す  
偉大の生れる時だ

(三月九日)



瀕死の人に與ふ

汝の病あつく  
汝はいま死に瀕んでゐる  
暗い、深い、無間の底から不可抗の手が  
すでに汝の手を握つた  
汝はいま何を考へ  
また何を望んでゐるか  
こんこんとして睡る者よ

汝の縁者はみな涙にひたり  
汝の友はみな愁に凍えてゐる  
感動が人人の心に常習の魔術をかけた  
その中で  
汝は睡つてゐる  
志づかに、またやすらかに  
こんこんとして睡る者よ  
起きよ、めざめよ  
汝のその従順のころを棄てよ



汝のそのつつしみ深い忍黙を破れよ  
死に背け  
死の面上に拳を興へよ  
死に降服する事なく  
ひたすらに生きよ  
死はただ空洞である  
死はただ敗残である  
死に落ちるは人間の墮落である事を知れよ  
死ぬなかれ、死ぬなかれ  
こんこんとして睡る者よ

汝は今まで生きながら死んでゐた  
汝の仕事は皆生のない破片に過ぎなかつた  
汝の本能と良心とがめざめかけて来た時  
汝は死の力におさへられた  
そして脆くも死んでゆかうとする  
涙と哀悼とに圍まれ  
萬人の死を死なうとする  
起きよ、睡るものよ  
その甘美の情念を却けよ  
その卑屈な平安を軽んぜよ  
汝の生きる時また汝の一生に値ふ時が



今こそ来たのである  
ひたすらに生きよ  
生きる事のまことを捉へよ  
汝の餘命は短い  
疾く起きよ  
起きて此の廣大無邊のいのちを得よ  
こんこんとして睡る者よ  
汝に穢ぎかけられる多くの涙を  
汝は明かに心讀せよ  
人の感情の淫奔性を洞察せよ

汝は正しく、たぢろがず、亂れず  
汝の魂に人間の本体をめざましめ  
さらにその源泉たる自然を體感せよ  
現實の微妙に溶け込めよ  
謙讓を極めた今の汝の心をもつて  
いのちに入るはただ力の有無である  
起きよ、めざまめよ  
死は醜し  
愚かなあきらめの小康に身をまかす事なかれ  
死に勝ち、死を滅ぼし  
あくまで汝のいのちに莊嚴せられつつ



肉體の敗闕と共に  
美しく、確然たる運命に歸れ  
起きよ、めざめよ  
こんこんとして睡る者よ

(三月十四日)

あつたはらひの  
あつたはらひの  
あつたはらひの  
あつたはらひの  
あつたはらひの  
あつたはらひの  
あつたはらひの  
あつたはらひの  
あつたはらひの  
あつたはらひの

### 晚餐

暴風をくらつた土砂ぶりの中を  
ぬれ鼠になつて  
買った米が一升  
二十四錢五厘だ  
くさやの干ものを五枚  
澤庵を一本  
生姜の赤漬



玉子は鳥屋から

海苔は鋼鐵をうちのべたやうな奴

薩摩あげ

かつどの鹽辛

湯をたぎらして

餓鬼道のやうに喰ふ我等の晚餐

ふきつゝのる嵐は

瓦にぶつけて

家鳴やな震動のけたたましく

われらの食慾は頑健にすすみ

ものを喰らひて己が血となす本能の力に迫られ

やがて飽滿の恍惚に入れば

われら靜かに手を取つて

心にかぎりなき喜を叫び

かつ祈る

日常の瑣事にいのちあれ

生活のくまぐまに緻密なる光彩あれ

われらのすべてに溢れこぼるるものあれ

われらつねにみちよ



われらの晚餐は

嵐よりも烈しい力を帯び

われら食後の倦怠は

不思議な肉慾をめざましめて

豪雨の中に燃えあがる

われらの五體を讃嘆せしめる

まづしいわれらの晚餐はこれだ

(四月二十五日)

## 五月の土壤

五月の日輪はゆたかにかがやき

五月の雨はみどりに降りそそいで

野に

まんまんたる氣魄はこもる

肉體のやうな土壤は

あたたかに、ふくよかに



まろく、うづたかく、ひろびろと  
無限の重量を泡だたせて  
盛り上り、もり上り  
遠く地平に波をうねらす

あらゆる種子をつつみはぐくみ  
蟲けらと呼ばさまし  
悪きもの善きものの差別をたち  
天然の律に志たがつて  
地中の本能にいきづき  
生くるものの爲には滋味と時とを興へ

朽ち去るものの爲には再生の隠忍を教へ  
永劫に  
無窮の沈黙を守つて  
がつしりと横はり  
且つ堅實の微笑を見する土壤よ  
ああ、五月の土壤よ

土壤は汚れたものを恐れず  
土壤はあらゆるものを浄め  
土壤は刹那の力をつくして進展する  
見よ



八反の麥は白緑にそよぎ  
三反の大根は既に分列式の儀容をなし  
其處此處に萌え出る無数の微物は  
青空を見はる嬰兒の眼をしてゐる  
ああ、そして  
一面に沸き立つ生物の匂よ  
入り亂れて響く呼吸の音よ  
無邪氣な生育の争闘よ  
わが足に通つて來る土壤の熱に  
我は烈しく人間の力を思ふ

(五月十六日)

### 淫心

をんなは多淫  
われも多淫  
飽かずわれらは  
愛慾に光る

縦横無礙の淫心  
夏の夜の



ひんむんと蒸しあがる  
瑠璃黒漆の大氣に  
魚鳥と化して躍る  
つくるなし

われら共に超凡  
すでに尋常規矩の網目を破る  
われらが力のみなもとは  
常に創世期の混沌に發し  
歴史はその果實に生きて  
その時劫を滅す

されば

人間世界の成壞は  
われら現前の一塵にあつまり  
われらの大は無邊際に充ちる

淫心は胸をついて  
われらを憤らしめ  
萬物を拜せしめ  
肉身を飛ばしめ  
われら大聲を放つて  
無二の榮光に浴す



をんなは多淫  
われも多淫  
淫をふかめて往くところを知らず  
萬物をここに持す  
われらますます多淫  
地熱のごとし  
烈烈

(八月二十七日)

秋の祈

秋は唳唳と空に鳴り  
空は水色、鳥が飛び  
魂たましのいななき  
清淨の水ところに流れ  
こころ眼をあけ  
童子となる



多端紛雜の過去は眼の前に横はり  
血脈をわれに送る

秋の日を浴びてわれは静かにありとある此を見る  
地中の營みをみづから祝福し  
わが一生の道程を胸せまつて思ひながめ  
奮然としていのる

いのる言葉を知らず

涙いでて

光にうたれ

木の葉の散りしくを見

獣けだものの嘻嘻として奔るを見

飛ぶ雲と風に吹かれる庭前の草とを見

かくの如き因果歴歷の律を見て

こころは強い恩愛を感じ

又止みがたい責を思ひ

堪へがたく

よろこびとさびしさとおそろしさとに跪く

いのる言葉を知らず

ただわれは空を仰いでいのる

空は水色

秋は唳唳と空に鳴る

(十月八日)



6263

道程

道程



昭和二十二年六月十一日 印  
昭和二十二年六月十五日 發

行 試

著者	高村光太郎	定價七十圓
發行者	米岡來福	
印刷者	長谷川伊助	
配給元	日本出版配給株式會社 北海道支店	
發行所	札幌青磁社	

札幌市南八條西五丁目  
電話小樽一〇六一〇番

本館所本製内竹 國印合組調印合製編札



k. 17

札幌青磁社





911.56

TA45

2



終